

# 山で木を切り、炭を焼く

## ある炭焼きと薪炭林のかかわり史

The Individual's Choice and Action in Environmental Use and Restoration  
: A Case Study of the Relationship between a certain Charcoal Maker  
and Coppice Forests in Wakayama

吉村 郊子

YOSHIMURA Satoko

はじめに

- ①日本の木炭生産の変遷と「紀州備長炭」
- ②和歌山県における森林の概況
- ③紀州備長炭一原木と生産工程
- ④ある炭焼き(木炭生産者)と薪炭林のかかわり史

おわりに

### 【論文要旨】

自然環境の再生や保全にかかわる問題については、今日、多くの人びとが関心を寄せている。とくに、「サステナビリティ (sustainability: 持続可能性)」の観点から、限りある自然資源をどのように利用し、再生させていくかということは、現代を生きるわたしたちにとって、大きな課題のひとつになっている。その際、自治体や国家など行政レベルでの取り組みや、集団における制度や規範などが注目されて、重要視されることが多い。しかし、一方では個人が、さまざまな制度や集団とのかかわりのなかで、この問題といかに向きあうのか—すなわち社会や経済、文化などさまざまな要因の影響を受けつつ、自身と自然環境のかかわりのあり方をいかに選びとっていくのかということも、大切ではないだろうか。そうした個別の理解や選択の積み重ねこそが、制度の改変や適切な運用をもささえる原動力になると考えられる。

本論文では、山林という自然環境と人のかかわりの様態を、山林を伐採する際の制度や規範といった大きな枠組みからとらえるのではなく、実際に山林と深くかかわってきた個人の営みの事例からとらえ直す。具体的には、和歌山県におけるひとりの炭焼き(木炭生産者)と薪炭林のかかわり史の事例を取りあげる。そして、山林利用における個人と制度や規範、集団などのかかわりのプロセスにおける「個の選択とふるまい」に焦点をあてて、分析をすすめる。

以下では、まず近年の日本における木炭生産の変遷や、和歌山県における備長炭の生産および山林のようすについて概観する。そして、木炭生産の作業工程やその際に利用される山林の樹木についてまとめたうえで、ある炭焼きの薪炭林利用歴を追っていく。そこには、約半世紀のあいだに、ひとりの炭焼きが実際に伐採してきた14ヵ所以上の薪炭林が登場する。それらの薪炭林と炭焼きのかかわり史の詳細から、ある個人がさまざまな状況の変化のなかで、その都度いかなる選択をして、薪炭林とのかかわり方を選びとってきたのか、さらには炭焼きという生業を営みつつ、薪炭林の再生や持続的な利用をもささえてきたのかを、明らかにする。また、自然資源の利用と再生の問題において、個人が制度・規範や他者に対していかなるはたらきかけをなしているのかといった点や、それぞれの関係のあり方についても、考察する。

【キーワード】 木炭, 山林(薪炭林), 炭焼き, 個人史, サステナビリティ(持続可能性)